

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
April 2022

No.39 **【特集】**
連携(実践×研究):Style

今年度の特集は実践×研究の連携に焦点を当てます。初回は連携の形に言及した「Style」がテーマの座談会。新年度の事業計画、新コーナーの「ミュンヘン便り」もスタートした充実の春号。





3月中旬、地元の自然観察園は黄色いヤマブキソウと白いニリンソウが満開でした。色味の少なかつた世界がだんだんカラフルになるこの季節が毎年とても楽しみです。

Presented by Yoko Niide

CONTENTS

FIRST WORD ● 羽田正
2022年度によせて …… 2

特集：連携(実践×研究)：Style

助成対象者オンライン座談会

● 中村晋一郎 × 渡辺剛弘 × 渡辺博重 × 豊田光世 × 山口一岩 × 原直行 × 谷光承
多様な連携の形が新しい変化を生み出す …… 5

佐渡島森里海探究プラットフォーム企画チーム

● 長島崇史・斎藤紗織
立場とセクターを超えた活動 …… 12

私たちの取り組み—助成対象者からの寄稿

国際助成プログラム ● 香坂 玲
「共感」をベースに資源利用をめぐる「不信任」の払拭を目指す …… 14

2022年度 事業計画 …… 16

『公民館のしあさって』読書会@宮城県鳴子温泉
公民館ってどんなところ? …… 19

「私」のまなざし ● 松井 崇
Tokyo 2020の無形のレガシーとしての「自他共栄の科学」 …… 20

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」・「外国人材の受け入れと日本社会」
2021年度プロジェクト一覧 …… 22

ミュンヘン便り 第1回 ● 寺崎陽子
ミュンヘンにて「ニューノーマル」を試行錯誤 …… 23

トヨタ財団ジャーナル …… 24
● 国際助成プログラム × 東京大学 IHS 集中講義「国際協働プロジェクトを支える／実施する倫理と論理」他

COVID-19危機が未だに収束を迎えていない今年の2月に、新しい

衝撃が世界を襲いました。プーチン大統領の主導によって、ロシア連邦が隣国ウクライナに対して「無名の師」——大義名分なき戦い——といえる侵攻を開始したことです。この稿を執筆している段階では、まだこの戦いの帰趨がどのようなものかは全く不明です。確かなのは、COVID-19危機と同じかあるいはそれを上回る影響を世界に与えるだろうことです。とりわけ1989年のベルリンの壁崩壊と冷戦終結後に始まったグローバル化を軸とする時代の流れは大きく揺さぶられるはずは

冷戦終結とともにグローバル化が始まった時期には、世界に存在したさまざまな「壁」がとりはられ、人、情報、物資、資金の流れが加速しました。その結果として、「鉄のカーテン」の向こう側の旧共産圏の解体、EUなどの地域統合の進捗、自由貿易の旗頭としてのWTO(世界貿易機関)の誕生、インターネットの出現など目覚ましいばかりの変化が国際社会に生じたことは、記憶に鮮やかに残っています。

しかし、このグローバル化の推進力も時間の経過とともに徐々に失われ、最近になるとブレクジット、アメリカ・メキシコ国境の壁などの「壁」が再び世界に現れます。そして勃発したのが国際的にも国内的にも人の流れを止め、ソーシャル・ディスタンスを課すCOVID-19危機でした。さらにウクライナに侵攻したロシアに対して、西側諸国を中心とする国際社会は、まさに人、情報、物資、資

開拓や協働事業の企画などにも、デジタル技術やSNSを積極的・効果的に活用したいと思えます。

ト ヨタ財団では、COVID-19危機の発生後に顕在化したさまざまな社会的変化を視野に入れて、過去2年に亘り助成プログラムの見直しを行ってきました。それが一段落したこともあり、2022年度は基本的に前年度の枠組みを大きく変えずに助成活動を実施して参ります。これまで以上に多くの方々に関心をお持ちいただければ幸いです。

2022年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長
羽田 正

金の流れを遮断する制裁を加えています。これに対抗して、ロシア側も「壁」を築くのは疑いありません。ベルリンの壁崩壊とともに始まった一つの時代が明らかに終わり、新たな「壁」が築かれる次の時代が始まろうとしているようです。この点は、今後の助成活動を行う上で私たちトヨタ財団が視野に収めるべきことです。

一方でネット上の世界に目を向けると、「壁」とは異なる風景が見えてきます。今回の戦役で印象深いのは、ロシア軍の侵攻が始まったその時点から、ウクライナ市民がSNSを介して、彼らや兵士の果敢な抵抗やロシア軍の空爆下の日常生活、あるいは脱出を図る避難民の厳しい旅についての画像や動画の発信を始めたことです。このビジュアルなイメージが即座にネット上で拡散され、非常な速さで国際的世論を形成したのには驚かされます。開戦前には中立的だったドイツをはじめとするウクライナ周辺の国々が数日のうちに積極的にウクライナ支援の方向に舵を切った背景には、このウクライナ市民からの積極的な画像と動画の発信があります。かつてならCNNのような大メディアでなければできなかったことが、今やデジタル技術の革新に伴いスマートフォンとSNSのプラットフォームの組み合わせで誰でも実行できるようになっています。

今後は、現実世界での実践と同じかそれ以上に、SNSを活用した情報の発信が重要な意味を持つことになるでしょう。トヨタ財団も、助成事業の紹介や事業間の連携はもちろん、新たな助成分野のウクライナ周辺の国々が数日のうちに積極的にウクライナ支援の方向に舵を切った背景には、このウクライナ市民からの積極的な画像と動画の発信があります。かつてならCNNのような大メディアでなければできなかったことが、今やデジタル技術の革新に伴いスマートフォンとSNSのプラットフォームの組み合わせで誰でも実行できるようになっています。

もちろん、その背後で、世界と日本の動きを大局的に俯瞰して時代の変化を注意深く読み取り、それに伴って生じるさまざまな社会的課題に目を向け、より意義深い助成活動のあり方を不断に真剣に議論してゆきたいと思えます。

トヨタ財団は、2年後の2024年に設立50周年を迎えます。それに向けてより大きな社会的意義を持つ助成財団となるべく、一層の努力を続けていく所存です。皆様の厳しくも温かなご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



中村晋一郎



渡辺剛弘



渡辺博重

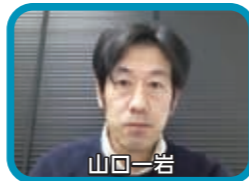
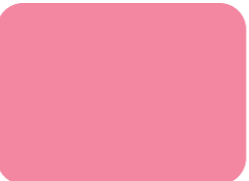
2020年度 国内助成
善福寺川がつむぐ、世
代を超えた協働 ―
都市の水辺環境再生
プロジェクト



2021年度 国内助成
自然共生の価値創造に
取り組む共創プラット
フォームの構築



豊田光世



山口一岩



2019年度 研究助成
きれいな海から豊かな
海への実現戦略 ―瀬
戸内海的环境と資源の
マネジメント



原直行



谷光承

助成対象者オンライン座談会：連携(実践×研究)が創り出すもの

多様な連携の形が 新しい変化を生み出す



司会：武藤良太
(トヨタ財団プログラムオフィサー)

本特集の初回は、「環境分野」に関わる取り組みを推進されている3つの助成対象プロジェクトの方々にご登壇いただき、それぞれのプロジェクトにおける「実践」と「研究」の関係性を紐解きながら、「連携」が持つ意義やその姿をどう捉えているかに焦点をあてました。

ただ、私の研究分野である海についていうと、海の現場研究から離れる人が今続出しています。たとえば既往のデータを集めてそれを解析する、あるいは数値シミュレーションによって海

山 今回助成をいただいている中で、私の立ち位置というのは、研究者です。我々の研究成果のアウトプットとして、実践の部分は主に観光に担ってもらっています。

中 私の場合、両者を切り分けるのは難しいです。私は川や水循環の研究をしているのですが、実践の中で気づかされること、学ぶことがとても多くて、そこで見つけたテーマみたいなものを研究室に持ち帰って、研究者の立場から研究的な手法を使ってエビデンスを作る。それをまた現地にフィードバックするようなやり方が今のスタイルなので、個人的には実践と研究を一体的に進めていると思っています。

武藤 実践と研究をきれいに分けることは難しいとは思いますが、皆さんはどちらに軸足を置いているのか。実践あるいは研究という視点で自身のプロジェクトへの関与、立ち位置がどうなっているのかということからおうかがいできればと思います。

実践と研究、 それぞれの立ち位置



【特集】

連携(実践×研究):Style

トヨタ財団では、「実践」に主眼を置いた助成プログラム、「研究」を中心に据えた助成プログラム、それぞれが存在します。現実世界の中で具体的なアクションを試みながら定着や波及させていく取り組みと、物事の真理を捉え新たな問いや価値を見出していく取り組み、その双方はそれぞれに非常に重要な意味を持ち、また、決してパラレルな関係にはないものです。

ただし、「実践」と「研究」が常に緊密で良好な関係性にあるかと言えば、必ずしもそうではありません。たとえば、1つのプロジェクトの中に共存しているように見えて、どちらか一方の思惑や力が強くなり過ぎると、結果として、その視点からの成果や利益などにもう一方が利用されるだけの関係になってしまう、そういった事例も過去の助成では目にしてきました。

「実践」と「研究」が適度な距離を保ちながら、良い影響を与え合い、相乗効果を生み出すスパイラルな関係性を描くことで、そこから生まれる成果や新たな価値が社会に還元されていく――理想論かもしれませんが、このような想いをもとに、2022年度の特集では「連携(実践×研究)」をテーマに掲げました。

今号から3回にわたり、各助成プログラムの助成対象者同士による越境的な対話を通じて目的地が見えてくる、そのような旅路となることをご期待ください。





●中村晋一郎(なかむら・しんいちろう)
 東京大学 特任助教などを経て、現在名古屋大学大学院工学研究科土木工学専攻 准教授。市民団体「善福寺川を里川にカエル会(通称：善福蛙)」共同代表。2020年度国内助成プログラム「善福寺川がつむぐ、世代を超えた協働 一都市の水辺環境再生プロジェクト」助成対象(代表：三田秀雄)。

で起きている現象を捉えるというような方向に舵が切られています。

それはある意味、これだけデータが蓄積されてきた中で、あるいはコンピュータ技術が発展する中で当然の方向性だとは思いますが、僕は自分の手法として、実際に船に乗って現場の海を見て、自らが採取した試料を解析する姿勢を重視しています。今回のプロジェクトとは外れたところで言いますと、僕は海の研究者としてはかなり実践に重きを置いているスタイルではないかと思えます。

●豊田 私は、地域でプロジェクトを進めていくアクターのコミュニティを作ることに従事してきました。NPOや市民研究所のようなさまざまな団体を作って、地域の方たちが中心になって環境保全を進めていく土壌作りのようなことをやってきました。地域の方たちをエンパワーメントしながら、自分は伴走するような感じで関わっているのですが、そういうことをやっている人はそもそも研究者な

のか、私がやっていることは研究なのかということについては、いろいろな考え方があると思えます。

大学の研究者は、そのような肩書きを持っているだけでなく本人にそのつもりがなくても、どうしても発言にある程度の権威が発生してしまうので、ヒエラルキーが生じないような気をつけたいと思っています。最初に佐渡で市民研究所を作ったときも、大学の先生たちがいるのなら、その人たちが来てくれて環境を良くしてくれるんだというふうには思わなかったわけですが、でも、そうではなくて、自分たちがアクターになって地域の環境のことを知ってアクションを起こしていかないといけないと思うためには、研究者の立ち位置をやはり意識的に変えていかないといけないと思っています。

●渡辺剛 私の場合は大学に勤

めていることを言わないようにしています。豊田さんがおっしゃったような地域の皆さんの目線というのがありますが、自分自身が研究者として関わっているわけではないと最初から思っていたからです。研究者や大学の先生というイコール専門家として見られてしまいがちですが、実



●渡辺剛弘(わたなべ・たけひろ)
 善福寺川を里川にカエル会の活動に2014年から参加。上智大学国際教養学部、グローバル・スタディーズ研究科で文化人類学の准教授を務めるほか、在住地の東京都杉並区で水辺環境の保全活動に取り組んでいる。

チームと実践するチームの分業体制ができていくということ。両者を知っているのが私で、そこを繋いでコーディネートしたという形なので、山口先生自身がガイドツアーの養成をするわけではないし、谷さん自身が研究するわけではないということ。分業ができたのではないかと思っています。研究をやりながら、かつそれをどう社会還元していくかというところで、谷さんたちに入っても良かったということ。環境系の活動に携わる人たちはすでに横に繋がっていて、だいたいお互いにみんな知っています。ですから、今回ガイド養成をやったときに、有機的に繋がっていたので、1から全部立ち上げたというよりは、今まで横に繋がっていたところをうまくコーディネートしたという流れになっています。

みんなが先生、みんなが生徒

●武藤 皆さんのプロジェクト

は実践と研究が、いわゆる有機的に繋がっているというところが大事だと思いますが、意識していること、あるいは取り組みがより活性化するために、皆さんが心がけていること、仕掛けていることがあればお話ください。

●豊田 今回のプロジェクトのことではないのですが、佐渡で市民研究所を立ち上げた



●渡辺博重(わたなべ・ひろしげ)
 2012年から善福寺川を里川にカエル会で活動。自らの原風景である身近な自然の保全・再生、普及啓発に取り組む。すぎなみ環境ネットワーク、井の頭かいぼり隊、遅野井川かっぱの会としても活動。

●原 今回の活動しているのは研究助成なので、国内助成のプロジェクトとは少し違うなと思いつながら聞いていたのは、私たちは研究

きに、対等な立場でやっていくことの難しさを感じていました。その思いから、市民研究所では「みんなが先生、みんなが生徒」というキャッチフレーズを掲げて、私たち研究者も含めてこの湖のことを知りたいし、みんな学びながらなができるか考えているということを意識的に強調して、集まる機会があることに共有していました。

●中村 今の「みんなが先生、みんなが生徒」というのをそのまま善福蛙で借りてきてうちも一つのコンセプトにしています。地域に入ると本当に地元の方のほうで遥かに地元のことや生き物のことに詳しいので、みんなが先生であり生徒という対等な立場であることを、私個人だけではなく、団体としても非常に意識しています。

●渡辺博 どうしても大学の先生のほうが立場が上だという意識が私にもなんとなくありましたので、先生が言っているそれは知っていることだけど、ここで言ってもいいのかなとか、先生、それはそうじゃないよといったようなところも、当初遠慮していたときは、やはりありました。そういうときにこのキャッチフレーズは市民にとってはとてもありがたいです。

●中村 私たちは、風の人、土の人という表現の仕方をよくするのですが、風の人というのは体系立った知識や経験をその地域に撒いていく。そしてその落とされた種が、地域にいる土の人によって育てられるという意味合いなので、風の人が研究者の役割、土の人が実践者の役割と言えらると思います。

学生時代、私は風の人になりたいと思っていました。最近私が思うのは、ある特定の課題や地域を掘り下げていくことによってたどり着く根源的な真実というものが、土の人としてある特定の地域を掘り下げていくことによって生まれる世界共通の真実があるだろうという仮説を持って実践しています。そうすると風の人、土の人という二者択一は意味をなさないとはいえ、両方あり得る。そのような考え方を持っていていいです。ですので、おそらく研究のあり方や学問のあり方みたいなのも多様化してきていると考えているところです。

豊田 オンリーワンの事例から見えてくる知のようなものは私も大切にしたいと思っていて、帰納的、演繹的といったロジックだけではなく、実践を伴う事例研究というのは、もっと違う知識の生み出し方をしているのではないかと考えています。

先ほど自分がやっていることは研究なのかどうかよくわからないと言いましたが、仕組みを考えたり、他の地域にも反映できるような知識を生み出そうとしたりしている部分は、一市民としての視点とは違うかなと感じているので、なにか風的な要素は持っているかなと思います。私の場合は風だったのがだんだん土になっていっているのですが、そうすると地域との関係性も変わって、今のほうが地元の方に近い分、東京から通っていたときよりも厳しいご指摘やご意見をいただくよ

うにもなりました。同じ研究者でも研究分野の違いだけではなく、どこに所属しているかということも関係している。自分の経験を通じて感じているのですが、香川の先生方はいかがでしょうか。

山口 瀬戸内海でいま魚が獲れないという問題があり、漁業者もなんとかしたいという思いが強くなってその問題解決に関する依頼もあ

るのですが、実際問題、海の研究は非常に遅れていて、ロケットを飛ばして宇宙に行く時代に、本当に我々は海のことを知らないんだなというのが現状です。そういう意味では日々プレッシャーを感じながらやっている部分はあります。

先ほど善福寺川のプロジェクの方が地元の人の方が川のことをよく知っているとおっしゃっていましたが、まさに海の研究もそれで、漁師さんは毎日海に出て漁をしています。ところが我々研究者で毎日海に出ている人はいません。研究者と実践者がだんだん乖離してきているのではというようにお話がありますが、今回の我々のプロジェクトに関しては、プロジェクト開始当初の2年前は、お互いやや緊張感をもって会話を交わっていたのですが、先日のツアー体験に行ったときには、だいぶ打ち解けた雰囲気が出ていて、2年間連携を組むことによって互いの距離がずいぶん縮まったんだと感じ

かしたい、まち作りをやっている人ならそれをどうにかまち作りに活かしたい、そのノウハウを学びたい、といったようなさまざまな思想があるはず。それはそのまま社会とすることだと思えます。しかし、その中である個人の利益のためだけに、なにか搾取しようとしている人が入ってくると、あれ、この人はちょっと違うなと感じたりします。

では、なぜその思想や、目的が全く違う中で一つの目標に向かってやれているかというところ、それはやはり善福寺川を里川に変えるという一つの大きな目標に対しては、みんな同じ方向を向いているからこそだと思います。そこが一致しているので、それぞれ違う背景や思想があっても、それぞれが自分の場所へと何かを持ち帰って折り合いをつけられる。一つの大きな目標に向かってプロジェクトを進めていけるかどうかは、このようなコンセプトやビジョンを共有できるかどうかというところに尽きるのではないかと気がしています。

渡辺博 そのとおりだろうと思います。里川に変えるという大きな目標に向かって一番同じ方向を向いてほしいス



◎ 山口一岩(やまぐち・ひとみ)

香川大学農学部准教授。生物活動の場としての沿岸海洋を物質循環の視点から理解することに当たっている。研究上のキーワードは光、親生物元素、一次生産者。瀬戸内海を主たる現場調査海域にしている。2019年度研究助成プログラム「きれいな海から豊かな海への実現戦略 ―瀬戸内海的环境と資源のマネジメント」代表者。



◎ 豊田光世(とよだ・みつよ)

佐渡島森里海探究プラットフォーム企画チーム共同代表。新潟大学佐渡自然共生科学センター准教授。佐渡島をフィールドに自然共生社会の実現に向けた対話や合意形成の研究に従事。専門は、環境哲学、合意形成学、子どもの哲学。2021年度国内助成プログラム「自然共生の価値創造に取り組む共創プラットフォームの構築」助成対象(代表:長島崇史)。

じました。

渡辺剛 「気づき」という言葉がよく使われますが、やはり地元の人たちからも批判されたり指摘されることがあり、そういうことから私も私としては研究者が実践を行うことで、鍛えられているかなと思います。昔の研究者は、地元の人の方が身近になって親しくなってしまうと客観性が失われてしまうという恐れを強く持っていたと思いますが、その感覚は最近になって薄くなっているのではないかと感じています。現地の人たちから距離を保つことによつて客観性が生み出されたり、現地の人たちがとても身近で友達のような関係だったけれど、離れることによって批判できるようになる、クリティカルに見ることができるようになると思われていたからです。ですが、今は地元の人たちと触れ合うことによって研究に貢献できたり、いい研究ができるようになっていっているような状況だと思っています。

豊田 本当にその通りで、研究者とはなんなの感じだったので、ちょうど今の担当の方がだいたいお話のできる方ですし、最近活動が活発だということもあり、ここぞとばかりに新たな方法の突破口でいろいろ攻勢をかけているところ。私

渡辺剛 私はみんなで一緒にやってくることが一番大事かなと思っています。善福蛙がよく言われている「ドラゴンボールZ方式」というのがありますが、敵がいるけれどもそれを味方にしてしまふ。そういうことを常に考えているので、一緒に同じ方向を向いていない人たちがいるかもしれないけど、うまく一緒に方向を向くようになんとかできないかなと思っています。相手も私たちを敵とは思ってないので、みんなで一緒にやっていきましようということを中心しています。

豊田 今回私たちのプロジェクトには、生物多様性地域戦略を管轄する佐渡市農業政策課に参加してもらっています。自然共生について考えるうえで重要な部署であるため、情報共有しながら活動を進めています。でもそれだけでは十分ではありません。担当者が変わると連携体制が薄れてしまうことでもあります。私たちの強みは、市役所の職員3名が有志でプロジェクトに参加していることです。一市民という立場に留まらず、民と公をつなげる橋渡しとしての機能を果たしてくれています。私たちが作るうとしていているプラットフォームを、公的なものとしてきちんと位置づけていくために何が必要かということを、知恵を絞りながら考えています。

市役所はやはりツリー型の組織なので、新

コンセプトやビジョンの共有を

中村 私たちの活動を見てみると、それぞれ思想や背景や目的は全然違ってきます。それは研究者だけではなく、たとえば小学校の先生だったらそれをどうにか学校の活動に活



◎原直行(はら・なおゆき)
香川大学経済学部教授。専門は地域活性化論、エコツーリズム論、グリーンツーリズム論。研究者もフィールドでアクション・リサーチの手法を取り入れて、観光による地域活性化研究を行っている。

しいアイデアをどんどん作って事業化していくことは難しい状況です。そうした中で、このような民間プロジェクトから市が関与する事業を立ち上げていくということについての期待やニーズ感を持って参加してもらえているのかなと思います。

さまざまな連携の形を探る

武藤 環境というのは川、海、里山などがあるような状態であるか目に見えるため、客体化しやすい対象の一つだと思えます。研究的な部分と実践的な部分が組み合わさった取り組みの意義、もしくは重要性みたいなものを皆さんの目からどう見ているか、今後のことも含めお聞きしたいと思います。

中村 自分たちの手で変えられるという実感を持って、手を加えたことによって環境が反応してくれるという実感が伴うというのがすごく重要な点かなと思います。たとえば家の

中の家具だと動かしただけ瞬間にその空間の配置や雰囲気が変わりますが、環境は手を加えてから時間が経たないと変化が見えてきません。そのあたりは地域に入って実践することの一つの意味のようにも感じていて、実感が伴うということと、一方で自然環境を相手にしているからこそ、その実感が生まれるまでに大きなタイムラグが生じるのは、逆にジレンマでもあると思う。その辺りが、環境を対象にすることの良い面と難しい面かなという感じがします。

渡辺剛 今のタイムラグの話ですが、私たちは子どもたちのことをとても気にしています。川や海もそうだと思いますが、変わるのにとっても時間がかかるということ、たぶん私が生きている間には変わらないかなという現実性も感じています。ですが、それは子どもたちのためであり、また子どもたちの子どもたちのためでもあるかもしれないし、子どもたちが大きくなってから、川を変えられるような立場になってくれればいいなと思っています。社会を変えるということは本当に大変だなとも感じますが、子どもたちを巻き込むことによって、今現在種をまいて、未来に育ったら芽吹くのではないか、そのように期待しています。

渡辺博 僕はタイムラグに関しては、意外に反応が早いなと思っています。自然再生したということをしていきます。関わる人や組織が多いのでなかなかうまくいかないところもありますが、そのようなコーディネートが自分の役割で、コーディネーターは結構大事なのでは、と手前勝手ながら思っているところです。

谷 香川だけで取り組みが完結するわけではないし、今回は海のことでも活動していましたが、当然山や川も含めて里海という形になるでしょうし、海に面している都道府県すべてが関わってくるようになりますので、できるだけ我々だけではなく、多くの人を巻き込まないと問題の解決にはならないと考えているところです。

その中でやっていきたいと思っているのは、伝える人がまだまだ少ないので、さまざまな場所で活動している人たちを増やしていきたいということ。その中でも単に活動して知っているだけではなく、その裏づけになる部分は学びたいと思いますので、今後も山口先生や原先生をはじめ、研究者の方々と一緒にやっていけたらと思っています。たとえば、海ゴミの活動をしても海だけのゴミを回収しても解決できないんですね。我々の生活の見直しや、河川ゴミの問題なども関係している多くの人たちを巻き込んでの活動になっていきますので、子どもたちも含めて、次世代を見

遅野井川は、生き物が戻ってくるにはもう少し時間がかかるかなと思っていたのですが、川に入ってみると生き物の反応はものすごく早く、どこからやってきたんだろうというくらいスピードで生き物が戻ってきていますし、それから今まで川遊びなんて知らなかったはずの子どもたちが戻ってくるスピードもすごいです。生き物も子どもたちもちゃんと場を作ったら戻ってくるのは思いのほか早いと思います。

山口 我々は、研究と実践のいわば分業制を敷いたわけですが、理系的な客観的事実を明かしていくその事実の重要な部分を、うまく伝えてくれる手段というのが観光で、ガイドさんというのはそれを非常に上手に伝える人々だということです。そういう実利を得ることができたというのが私にとって大きな部分です。この取り組みの先は何を見据えるかということですが、山にしても川にしても、それから瀬戸内海のような身近な海にしても、人手を加えることによってその姿をある程度人間が変えることができると思います。

今海で起きている事実を明かす、そしてそれをより多くの人々に事実はこちらなんだと思えてもらう。豊かな海はみんながいいねと思わずですが、実はそれは個々人によって捉え方がかなり違うはずなので、この活動を通じて大きな共通項としてどういうものを描くのかということを追求、探究したいなと考えています。

原 研究者と実践者の距離が広がっているのではないかという話ですが、私も確かに専門据えた活動をしたと考えています。

豊田 環境保全に従事するうえで、環境が良くなっていくという実感、変化を感じられるということがとても大切だと思います。環境について学んだり、調査したりということから、もっと良くするためにできるのかということを考えて実践的プロジェクトを進めてきました。環境保全で具体的な成果を上げようとなると、特に環境の改変を伴うような取り組みの場合は、もはや研究の中だけではやりきれないのかなとも思っています。やはり実感を伴うことの大切さというのは、環境に関わる分野では感じています。

また、人を繋ぐということについては、気をつけて繋げないとうまくいかないことがあると思っています。まずはみんなが本当に気持ちよく繋がっていきけるようなプラットフォームを作る。そのプラットフォームを通して、人が繋がることになにか新しいものが見えてきたり、新しい取り組みが生まれたり。そういう小さな成果を蓄積していくことが、プラットフォームを作ってよかったねという実感に結びついていくのかなと考えていますので、その辺りを意識してやっていきたいと思っています。

武藤 実践と研究といっても、さまざまな連携の形があって、そこから新しいものが次々と見つかったり、生み出されていくのだろうなということをお話をうかがいながら一貫して感じる事ができました。本日はありがとうございました。



◎谷光承(たに・みつよし)
一般社団法人かがわガイド協会、NPO法人アーキペラゴ所属。海や川をメインフィールドとして、自然体験を通して学ぶツアーや活動、リスクマネジメント講習を行っている。また、所属するNPO法人で海の環境保全(海洋ごみの削減)にも取り組んでいる。

化しているなと思うのですが、一方で20代から40代くらいの若い研究者の中には、地域貢献をするなんて当たり前だという考えの人たちが増えてきていると思います。専門分化している一方で、両方ないといけないんだという人たちも着実に増えているという部分に私はとても期待しています。

今後の研究と実践ですが、研究者としての自分自身の立ち位置ってなんだろうと考えたときに、アクション・リサーチもやっていて、研究と実践の場を繋げるコーディネーターみたいな役割ができる人はなかなかいないと感じています。そういうことをやるのを立ち位置とすれば、自分が役立てるのではないかと思いました。たとえば香川県で言うと、海ゴミ、プラスチックゴミの流出が大きな問題になっていて、皆さんたちともその件でまた一緒に連携しています。それを実践の人たちとやりながら、今度は山口先生たちとは別の香川大学の人たちとどう繋いだらいいだろうか

※本オンライン座談会は、誌面に載せきれなかった内容を含めた拡大版をウェブサイトに掲載する予定です。

立場とセクターを超えた活動

——佐渡島森里海探究プラットフォーム企画チーム

特集の座談会では2021年度国内助成プログラム「自然共生の価値創造に取り組む共創プラットフォームの構築」(佐渡島森里海探究プラットフォーム企画チーム)の一人として、豊田光世さんにご参加いただきました。今回お仕事の都合上タイミングが合わず、残念ながらご参加いただけなかった同チームの共同代表である長島崇史さん(プロジェクト代表者)と、齋藤紗織さんのお二人に、活動に込める強い思いをおうかがいしました。



● 長島崇史
(ながしま・たかし)
探究する地方公務員。新潟大学在学中に佐渡でスギの研究をする。最近「学び」に関心がある。お米が美味しく佐渡に移住した。2021年度国内助成プログラム「自然共生の価値創造に取り組む共創プラットフォームの構築」プロジェクト代表者。

プロジェクト運営で意識していることは？

一度は自然界から姿を消したトキの野生復帰を目指して、佐渡での放鳥を開始してから10年以上が経ちました。しかし、トキの野生復帰や環境共生の分野で活動をはじめると若者があまり見えてきません。今の学習は、子どもの学びにはなっていますが、実践者である「アクター」の育成にはつながっていないのだという気がしています。

本プロジェクトでは、今ある課題に対してクリエイティブな対策を生みだしていく「探究」マインドあふれる社会の実現を目指しているのですが、そこで掲げる「探究」は、アクターを養成する際のひとつの鍵になるのではないかと考えています。自分の内発的な動機で調べ、深める探究学習は、知識だけで終わらない行動のモチベーションとなり、次世代のアクター誕生へと繋がっていくと思います。

今後やってみたいことはありますか？

そもそも佐渡島内でどういう人が何をしているのか、アクターの全容を把握できていないという状況があるので、まずはその現状を

調べ上げることが必要です。個人がなんとなく知っている「暗黙知」をデータベース化していきたいです。また、それは別に有機的に人が繋がるような場の重要性も感じています。人と人が出会い、話していくうちに新しいものが生まれる場。そういう化学反応が起きる楽しい場をつくれたらいいなと思います。

活動のきっかけとなったものはありますか？

佐渡の生物多様性はすごいと思います。たとえば田んぼの畔に足を踏み入れるとたくさんバツタがものすごい勢いでピョンピョンと飛んで逃げていく。自分の出身地では経験したことがなかったの

で、大変驚きました。その背景には、農家さんが草刈りが大変だといながらも畦に除草剤を撒かず農業をする、プライドのようなものが見えてきました。そのように頑張る人たちを見ると、環境のことを考える大切さに改めて気づかされます。やはり、環境のいいところで作った米は美味しいですね。環境は私たちの生活に直接関係するのだということを実感して、活動をはじめました。

今後の活動についてひとことお願いします

私もなにか地域に貢献したいという思いがあり、佐渡に移住しましたが、本業だけではできないことも多くありました。しかし、今回のプロジェクトのような取り組みは、思いのある人たち同士で集まり、モチベーションが原動力になって進んでいくので、スピード感もあって想いを実現できる。このことが私の中のモチベーションになっていますし、このような形で社会に貢献できることがある気がつきました。

地域が元気であるためには誰かが頑張る必要があると思っています。口だけではなく、行動に移す必要があると思いますし、自分もそのような人になりたいと思っています。私自身は今、行動するために足を踏み出したという状況です。そういう意味で、このプロジェクトは私の「探究」でもあります。一緒に新たな一歩を踏み出す人を増やしていきたいです。



● 齋藤紗織
(さいとう・さおり)
佐渡市公立小学校教諭(理科教育学)。中学校時代に佐渡に移住した際、佐渡に惚れ込み、「一生ここに住む！」と決意。現在、自身が代表を務める「佐渡科研究会」で「佐渡島だからできる学び」を探究中。

前回のプロジェクト活動で感じたことは？

私は、2020年度国内助成(しらべる助成)の「みんなで作る探究型地域学」——多様な世代がつながる学びの場づくりをめざして」というプロジェクトの代表を務めていました。その取り組みを通して、佐渡ではさまざまな自然共生の取り組みがされているにも関わらず、各団体が繋がっておらず、情報共有も十分にはできていないという現状が分かりました。

情報があれば、もっと子どもたちの教育にもいかすことができそうです。佐渡にある自然を知ることが、佐渡の子どもたちが世界で通用する人物になる鍵だと感じています。子どもたちのためにも、繋がりが情報発信をしていくことで、取り組みが見えやすくなると思います。

地域や活動を持続可能にするために心がけていることは？

地域をサステナブルにしていくためには、やはり人材育成が必要だと考えます。私の住む集落には、若者がやりたいことを地域の人

にプレゼンする面白い文化があるのですが、そこでいい提案があると、集落の人が取り組みを支援してくれます。次世代にチャンスを与え、それで失敗しても絶対にけなさない。

それから、集落の人は前向きに行動する人が多いです。若者はその姿を見て吸収し、自分もできるようになる。このように育った若者は、上の世代がいなくなったときに、不安だけやってみよう！となりやすいですね。こういう循環が環境分野でも起これば、人が育ち、持続可能な活動になっていくのではないかと思います。

活動のきっかけとなったものはありますか？

小中学生時代は大阪の中心部で過ごしました。いろいろあってすごく辛い時期だったのですが、佐渡に転校してきて、海を眺めていた時に「あれが水平線か」と、本で読んでいた知識と現実が繋がりました。雷に打たれたような衝撃で、「生きるのっておもしろいかも！」と思うことができました。自然に助けられた経験をしている

ので、この場所や自然を守りたいし、恩返しをしたい。これが自分のモチベーションの原点だと思っています。

教員という仕事を選んだのも、美しい自然を守ったり、居心地のいい地域を作りたいという思いからです。公教育の教員は、次の日本をつくっていくことが大きな仕事だと考えています。

実践と研究の連携の意義をどのように考えていますか？

公教育の場にいるというのが、私の価値の一つだと思っています。教員であることで、実践してみても、それがうまくいったかどうかフィードバックもできるのが強みです。

でも、たとえばいくつもの事例をメタ分析的に並べてみるというようなことは私たちにはできません。そのような点で研究者は必要だと思っています。取り組みをブラッシュアップしていくには、片方だけでは難しいと思います。

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号では国際助成プログラムから、**遺伝資源として注目されている伝統野菜や養蜂を題材に、日本、中国、韓国の東アジアの交流を目指し活動している香坂さんよりご寄稿をいただきました。**



「共感」をベースに資源利用をめぐる「不信感」の払拭を目指す

●香坂玲（東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻）

2017年度国際助成プログラム
「助成題目」日中韓における遺伝資源と関連する伝統的知識の活用と保全のための「東アジア・共感モデル」の構築——伝統野菜と養蜂を題材として

セクター、国、世代などの垣根を超えた連携

本プロジェクトでは、2017年度に国際助成を受け、遺伝資源として注目されている伝統野菜や、養蜂を題材に、日本、中国、韓国の東アジアにて、栽培、調理に関する知識の学びあいと体験を通じた文化理解を推進した。国際的な対立や「ナショナル・プライド」の面が強調されがちだが、「共感」と「交流」による「気づき」を糸口とした展開を試みた。交流については、遺伝資源としての野菜の貿易や伝播の交流と、人や文化の交流の双方を内包した内容となった。

遺伝資源は、「遺伝の機能的単位（遺伝子）を有する植物・動物・微生物その他に由来する素材であって現実の又は潜在的な価値を有す

るもの」と定義される。微生物が葉、食品、化粧品などの開発で大きな役割を果たすことから、鉱物、石油などと同様に、遺伝資源はそれぞれの国にとって大きな関心を集めてきた。遺伝資源とそれに関わる伝統知は、利用されて初めて恩恵があり、提供国側と利用国側の「不信感」を背景とした対立が生じている現在、セクター、国、世代といった垣根を超えた連携した活動が求められている。本プロジェクトが注目した伝統野菜は、学術的な定義はなく、その曖昧さゆえに緩やかな連帯やブランディングのプラットフォームになってきた（在来品種は定義がある）。伝統野菜が社会に息づく「生きた遺産」となるには、各地域における先人の改良努力に敬意を払いつつ、そのルーツをたどり、古くから遺伝資源

活動状況

以下、時系列で活動を紹介する。2017年度は日本側メンバーが、韓国で開催された精進料理の実習に参加し、具体的なレシピを基にした調理や、その背景にある伝統・文化的経緯、環境的条件等について情報収集を行い、レシピ集を作成する準備を整えた。2018年2月に、レシピ集の作成の過程で連携することとなった、韓国の伝統野菜の一つである「ケゴル大根」の生産者を訪問した。同年9月には、日中韓の連携を目的としたワークショップを開催し、参加者の発表をベースとした議論に加えて、実際に伝統野菜の産地を訪れ、現地の生産者を交えて実体験を含む日中韓の参加者の交流を行った。特に宮城県大崎市では、農業遺産に認定された大崎地域を訪問していた農業関係者や現地の生

産者もNHKラジオ等を通じてワークショップを知って参加し、日中韓の交流の意義をメンバー以外の参加者とも共有することができ、活動について広く発信することができた。

2019年5月までの期間では、ワークショップの結果の取りまとめを進め、今後のレシピ集の作成に向けた情報の収集と整理を行った。特に、これまでプロジェクトを実施するなかで得られた知見として、伝統野菜、養蜂に対する潜在的社会的ニーズが高いことと、消費者、生産者のいずれも、生産、調理に関する知識を国を超えて共有することを希

望しているという「気づき」があった。

年度の後半からは、中国におけるレシピにも注力をし、雲南地域の文化人類学的研究を進める堀江未央氏・当時・名古屋大学、現・岐阜大学所属）をプロジェクトメンバーに迎え、中国の留学生の協力等も得ながら具体的なレシピ集の作成を進めた。現地の料理に関する書籍等も参照し、各料理の調理法について情報を収集することができた。

成果を発信し続け未来へつなげる

新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン中心の活動を余儀なくされる一方、助成期間の延長が認められ、2020年以降は次世代の教育へのアプローチを行った。日中韓の関係者とともに、韓国の小学校にて、環境教育のワークショップを実施、またオンラインでの日中韓ワークショップに沖縄や大分の中高生が参加するなど、今後プロジェクトに必要とされる次世代につなげることができた。



①欧州の研究者と世界農業遺産の能登半島を訪問（石川県穴水町 春蘭の里にて）。②日中韓の森林の伝統的知識に関する国際ネットワーク会議（中国・南京市にて）。③研究者の国際交流（中国・雲南省 中国科学院西双版纳热带植物园にて）。④高校生による交流の様子（琉球新報社提供）。

2020年度のワークショップには、オンラインで約60名が参加し、トヨタ財団の過去の助成対象者でもある静岡大学の

富田涼都氏、マレーシア国民大学のエリック・オルメド氏も発表。プロジェクト内外の参加者と活発な意見交換をすることができた。2020年9月には、沖縄県、大分県の高中生、三重県出身の大学生が交流するウェビナーも開催した。伝統的な産品の学びの実践について報告、情報交換を行い、地域を超えて産品の情報を共有することによる共感の萌芽の醸成方法について手掛かりを得た。その結果、日中韓のレシピ集の構築に向けてオンラインでのコミュニケーション・ツールを活用しながら活動を展開することができ、2021年に延期された生物多様性条約COPに向けた情報交換・発信を継続的に行うことができた。

途中からコロナ禍の影響で活動に制約は加わった反面、韓国やマレーシアの研究者と、国内の高校生や大学がオンラインで直接のやり取りをするなど、プロジェクト開始時には構想されていなかった交流が実現された。

最後にプロジェクト代表者としての感想を述べる。遺伝資源の分野での国際交渉においては対立が続き、食文化についても、各地域の誇り、ナショナルリズムとも関係しがちな傾向はあるものの、食、伝統野菜、養蜂は共感を促す素材として、文化交流、学術研究、さらには環境啓発の各方面で有効な素材だと実感した。欧州では、2019年に「ハチを守れ」というスローガンで有機農業や農薬の規制が訴えられた。コロナ禍で、食やライフスタイルが見直されるなか、日中韓の三か国でこのような交流が続くことを祈念している。



2022年度事業計画

トヨタ財団の本年度「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

当財団は、1974年の創設以来、生活の質の向上、自然環境の整備と保全、社会福祉の充実、教育・文化活動の振興などにつながる意欲的・創造的な研究や事業に対して、多彩な枠組みによる助成を実施してきました。2022年度は昨年度と同様、「国内」「研究」「国際」の3つの助成プログラム、2つの特定課題（先端技術と共創する新たな人間社会）「外国人材の受け入れと日本社会」、それにイニシアティブプログラムという枠組みを設け、人々のより一層の幸せの実現に向けた助成事業を展開していきます。

過去2年余りに亘る新型コロナウイルス感染症拡大によって、当財団の助成事業の運営は大きな制約を受けてきました。助成金贈呈式とその後の懇親会の取り止め、活動地の訪問の中止などがその例となります。

一方、この間に飛躍的に進んだIT技術の活用により、助成対象者との連携によるセミナーやワークショップ、公募説明会などをオンラインで随時開催できるようになりました。

りました。これらは当財団の活動とその成果を積極的に一般社会へ届けるための新しい取り組みとして、本年度も強化・拡充していきます。

今回のコロナ禍によって露わになった国内外の課題を克服するためには、人々の「つながり」や「交流」のあるべき姿をあらためて構想し、ITなどの新しい産業技術の適切な社会実装によりそれを具体化することが求められていくでしょう。本年度も、すべてのプログラムにおいて、この側面に重点を置いた助成を実施します。また、志を同じくする組織や機関との協働にも努めてまいります。

特定課題

「先端技術と共創する新たな人間社会」（5年目）と「外国人材の受け入れと日本社会」（4年目）の2プログラムについては、基本的な内容を変更することなく継続。但し、「先

端技術」については、助成金予算4000万円のうち500万円程度を、萌芽的個人研究プロジェクトを支援する新たな枠組みに振り向ける。

先端技術と共創する新たな人間社会

●募集概要

助成対象者の成果・中間報告会・公開ワークショップ等をオンライン開催することで、プログラムの告知強化と助成対象者間のネットワーク形成を支援。

【募集時期】

2022年9月～11月

【助成予定金額】

総額4000万円

・共同研究プロジェクト…3500万円程度

【500～1000万円程度/件】

・個人研究プロジェクト…500万円程度

【100～200万円程度/件】

【助成期間】

2023年4月から最長3年間（1年、2年または3年間）

外国人材の受け入れと日本社会

●募集概要

【テーマ】

外国人材の受け入れと日本社会

【募集時期】

2022年9月～11月

【助成予定金額】

総額5000万円

【助成期間】

2023年5月から2年または3年間

●募集概要

【テーマ】

新常态における新たな着想に基づく自治型社会の推進

【助成カテゴリ】

- ①日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成
- ②地域における自治を推進するための基盤づくり

【募集時期】

2022年4月～6月

【助成予定金額】

総額1億1000万円

①「日本社会」…総額7000万円程度
【1000～2000万円/件】

②「地域社会」…総額4000万円程度
【上限600万円/件】

【助成期間】

- ①「日本社会」…2022年11月から3年間
- ②「地域社会」…2022年11月から2年間

国内助成プログラム

2022年度は、テーマにある「新たな着想に基づく自治型社会の推進」に直結するプロジェクトの応募を一層促す観点から、「自治」の取り組みに関する重視点や期待する成果などのさらなる具体化を図り、募集要項や説明会を通じて積極的な発信を行う。

助成カテゴリ①「日本社会」では、昨年度の実績を踏まえ、広く募集を呼び掛けると共に大学や高等専門学校が主体となったプロジェクトの発掘を継続し、選考方法については選考委員会でのプレゼンテーションによる最終選考を実施する。また、プログラムや当枠組みの趣旨や重視点等への理解度や合致度を高めるための応募段階でのプロセス（事前相談の要件化など）を検討する。

研究助成プログラム

全体テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、引き続き「協働事業プログラム」と「共同研究プログラム」を実施する。

協働事業プログラム

東京大学未来ビジョン研究センター（IF1）との協働により、若手研究者に対する安定した研究活動の場を提供し、その育成を支援する。2021年度に採用された2名の研究プロジェクトが2022年4月から開始となるが、本協働事業では3名採用の予定だったため、もう1名の選考を本年度実施する。

●募集概要

【テーマ】

つながりがデザインする未来の社会システム

【助成予定金額】

総額2000万円/年【主に人件費に充当】

【助成期間】

2023年4月から2024年3月（進捗報告を受けたうえで単年度単位で助成を決定）

共同研究プログラム

昨年度同様、ニューノーマル時代に再考が求められる社会課題に対応するプロジェクトを、分野/領域を限定せず幅広く募集する。

プログラム横断的な助成対象者間の交流を促す、助成対象者限定オンラインカフェミーティングも引き続き開催する。

●募集概要

【テーマ】

つながりがデザインする未来の社会システム…ニューノーマル時代に再考する社会課題と新しい連帯に向けて

【募集時期】

2022年4月～6月

【助成予定金額】

総額5000万円「上限800万円程度／件」

【助成期間】

2022年10月から2年間

【対象国】

東アジア・東南アジア・南アジアの国や地域
・東アジア：日本、中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル
・東南アジア：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム
・南アジア：バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカ

国際助成プログラム

助成プログラムの基本テーマと趣旨を継続する。具体的には、『アジアの共通課題と相互交流——学びあひから共感へ——』として、これまでの日本を含む東アジア、東南アジアに南アジアも加えた地域の共通課題に対する「2国以上の地域実践者による国を越えた交流・課題解決」への助成を行う。

新型コロナウイルス感染症に関し、引き続き人の移動に関して一定の制約は続くと思われるものの、リアルな交流も相応に可能となることが期待される。そのため、直接交流を前提とした助成を行う。

●募集概要

【テーマ】
アジアの共通課題と相互交流——学びあひから共感へ——

イニシアティブプログラム（非公募）

本年度も引き続き、トヨタ財団として支援の意義が大きい、主体的・能動的に取り組むべきと考えるプロジェクトを積極的に発掘していく。また、過去に助成したプロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とするプロジェクトへの助成も行う。

●プログラム内容

【対象プロジェクト】
民間財団として支援の意義の大きいプロジェクト

・財団独自の調査活動や研究会と連携するプロジェクトや他組織との共同助成
・NPOの基盤強化や市民参加など非営利セクターの発展に資するプロジェクト

公募プログラムにおけるモニタリングなどを通して、より大きな成果に結びつく財団として判断したプロジェクト

・書籍の出版のみならず、映像媒体（映画・ビデオ・DVD・漫画など）、デジタル媒体（ホームページ・メールマガジンなど）やシンポジウム、ワークショップ、メディアの活用など多様な方法を通じての成果の社会発信

【助成予定金額】

総額4000万円



『公民館のしあさって』読書会@宮城県鳴子温泉
公民館ってどんなところ？

本誌前号で紹介した「公民館のしあさって」の読書会キャラバンが、2021年12月中旬、すっかり冬の装いとなった宮城県鳴子温泉で開催されました。参加者は県内外から、公民館関係の方、保健師、教師、アーティスト、地域住民の方など総勢11名が集まり、スピーカーにはプロジェクトを代表して西山佳孝さんが招かれました。

●加藤慶子（トヨタ財団プログラムオフィサー）

公民館というと、どのようなイメージをおもちでしょうか。私は公民館にほとんど馴染みがなく、ハードとして建物の存在は知っているものの、その機能、役割などソフト面は、あまりよく知らなかったということに気づき、今回の読書会には雲をつかむような心持ちで参加したのでした。

西山さんのお話をうかがうと、公民館の考え方のベースには、教育基本法や社会教育法があり、学校教育を行う機関として小学校や中学校があるように、社会教育をけん引する機関として公民館が位置づけられているようです。社会教育とは、学校教育を除くすべての教育活動を指すもので、学術・文化的活動から、実生活に即する教育、生産教育、産業振興等が含まれます。地域の子どもから高齢者まで誰でも自由に集い、学ぶことができる生涯学習の場として作り上げられてきた公民館は、「人間形成を通じた間接的な社会形成」をめざすという重要な目標が掲げられてきたそうです。

にもかかわらず、今日の公民館において、その存在意義がわかりづらいものとなっている現状をどのように理解したらよいのでしょうか。その理由の一つとして、公民館の「偶然と無目的なハブ（拠点）」という特性が示されました。明確な目的のないものに当然予算はつけられず、その結果、施設数は急激に減り、残った施設でも、運営にはそれなりのノウハウが必要なため、大多数がうまく活用されていないという実情があるようです。そもそも公民館は、誰が来てもいいし、目的があってもなくてもいい、それゆえ効能を明確に示すこともできない。ただ地域の人々がつながる場所であり、そこから徐々に信頼関係が生まれ、地域社会が育っていく。これを「社会基盤」ととらえれば、それこそが公民館の役割と考えられるのではないか。しかし目先の効果・効能を求めようとすればかりに、公民館の語りづらさが発生するというのです。

ところで、公民館といえば趣味のサークル活動を思い浮かべる人も多いのではないで



《課題図書》

- 著者：公民館のしあさって出版委員会
- 発行：ポーターインク
- 価格：2,420円
- URL：https://kominkan.world/

しょうか。楽しそうにおしゃべりをしながら活動する利用者の姿は容易に想像できると思えます。これらの活動の本質は何なのかと考えていくと、このような交流はソーシャルキャピタル（社会関係資本）と言えるのではないかと西山さんは語ります。たわいないおしゃべりは「人々の絆」、「お互い様の文化」など社会的つながりとして育まれ、時として、人々の暮らしに影響を与え、地域の課題をごく自然に解決していく一つの理想的なカタチへと昇華していくのかもしれない。

質疑 疑応答でも話題は尽きず、さまざまな視点から公民館について考える機会になりました。私が認識していた公民館は、ほんの表面にすぎず、その潜在能力は未知数であるように感じました。社会基盤を支えるハブとして、誰にでも門戸を開き、無目的と偶然性を歓迎する公民館。参加者は思い思いに「公民館のしあさって」の姿を想像したのではないのでしょうか。こうして鳴子温泉の夜の読書会は無事に終了しました。

※2019年度 社会コミュニケーションプログラム「日本およびエジプトでの公民館づくりを通じた社会教育機関やその担い手へのリバース・イノベーション」

稽 古照今、古事記の一節であり「稽古」の語源であるこの語が示すように、時代の最先端のように見える科学も、実は先人の知恵に追いつくように発達することが往々にしてあります。近年加速度的に発展しているスポーツ脳科学(Sport Neuroscience)も例外ではありません。

2021年夏、コロナ禍ではありましたが、スポーツと平和の祭典・オリンピックが東京で開かれました(Tokyo 2020)。東京では2度目の開催でした。一度目(Tokyo 1964)は、日本の戦後復興の象徴として新幹線などに代表される多くの有形のレガシーを形成したとされます。成熟社会として迎えたTokyo 2020には、スポーツを老若男女の自己実現や健康長寿に資する真のスポーツ文化として根付かせるような、無形のレガシーの醸成が期待されています。そのヒントとなりうるのが、新たに「Together」が加えられたオリンピックモットー「Faster, Higher, Stronger, Together」(より速く、より高く、より強く—ともに)であると言えます。

ア ジア人として初めて国際オリンピック委員会となり、日本のオリンピック初参加(Stockholm 1912)やTokyo 1940の招致(後に返上)を実現するなど、日本のオリンピック史に大きな足跡を残した嘉納治五郎は、日本古来の武道である柔道の創始者としてもまた有名です。嘉納は幼少時代に身体が弱く癩癩持ちでしたが、青年期に柔術を修行すると身体が強くなると同時に心にも落ち着きや忍耐力が備わることを実感し、いくつかの柔術

これらは認知症の運動療法の可能性を示唆します。また、有酸素能力と認知機能(体力と学力)が子どもでも相関することが報告され、学校体育の重要性が見直される契機となっています。他方、アスリートのハイパフォーマンスにおける脳の貢献も暴かれ始めています。これらの体と心の関係とそれに及ぼす運動効果の背景には、インスリン様成長因子、脳由来神経栄養因子、性ホルモン、乳酸などが関与する多様な分子神経機構があると指摘されており、生物学的意義や興味をも包含されます。これらの運動神経科学は、個人の能力向上にフォーカスした「精力善用の科学」と言えるでしょう。

さらに最近、知能指数などで数値化できる認知機能と対をなす、共感性などの社会認知ややり抜く力、ストレス対処力といった非認知能力が社会的成功や健康長寿の予測因子となることで注目を浴びています。共感性や非認知能力の形成には、母子のスキンシップ等により視床下部で合成され下垂体から分泌されるペプチドホルモン・オキシトシンが重要な役割を担うとされます。面白いことに、柔道の母体となった柔術(特に寝技中心の流派)が若齢成人や高リスクな子どもの唾液中オキシトシン濃度を高めることが最近報告されました。柔道などのコンタクトスポーツは、嘉納治五郎が意図したように非認知能力の向上に役立つかもしれません。実際、非行少年が柔道やラグビー等でその攻撃性を抑制し、更生するエピソードは多くありますし、いくつかのエビデンスも示されています。このよう

「私」のまなざし 33

Tokyo 2020の無形のレガシーとしての「自他共栄の科学」 ～運動、武道、そして、eスポーツへ～

文・写真 ● 松井 崇

筑波大学体育系 助教
全日本柔道連盟 科学研究部 基礎研究部門長
日本オリンピック委員会強化スタッフ(情報戦略・医科学)
スペイン国立カハール研究所 客員助教
筑波大学スポーツイノベーション開発研究センター スポーツIT部門長



筑波大学構内の嘉納治五郎像



筆者による運動神経科学の動物実験の一コマ



柔道の総本山・講道館での研究合宿型授業(筆者は前列右から3人目)



次世代eスポーツの開発とその効果に関する共同研究風景

流派を基盤にして「人間教育の道」としての柔道を1882年に創始しました。その道標として、柔道のみならず体育全体に提唱されたモットーは、「精力善用 自他共栄」です。柔道は競技面が目ざされがちですが、本来は、相手と組み合い、攻撃防禦の訓練を通じて自己研鑽(精力善用)し、互いに高め合いながら世の役に立つこと(自他共栄)を目指す道であるという意味です。最新のオリンピックモットーとの類似性が興味深いです。ニュージーランドの発見者であるスペインの神経解剖学者ラモネ・カハールが、イタリアの病理学者カミロ・ゴルジとともにノーベル生理学医学賞を受賞したのは1906年ですから、実にその24年前、身体運動が脳に恩恵をもたらさしめる体と心の関係が存在することを、嘉納は柔道の創始により示唆していたと言えます。しかも、他者とともに発展することを目指す「Together」の要素も含めた形で、これが日本におけるスポーツ脳科学の萌芽であったと位置づけることができるかもしれません。

時 は下って1997年、米国ソーク研究所のフレッド・ゲージたちは、運動できる豊かな環境が記憶学習中枢である海馬の神経新生と肥大を促進することを動物実験により報告しました。スポーツの4要素(身体性、競争性、組織性、遊戯性)から身体性を取り出してその効果を探る、運動神経科学(exercise neuroscience)の始まりです。その後、ヒトでも習慣的な運動が海馬を肥大させ、記憶能に恩恵をもたらすこと、更に、前頭前野の司る実行機能を高めることも報告されました。

昨 今のコロナ禍において、オンラインの便利さを味わいながらも、何か物足りない。オフラインでしかできないことがある。伝わらないものがある。誰もがそう感じているのではないかと思います。果たしてそれは何なのか? この問いは、大学とは何か? という難問に昇華し、全ての大学人にも降りかかっています。なかでも、生身の人間同士の競争を楽しむことを軸とするスポーツを題材に、教育研究を進める体育人は、この問いに答えるべき宿命にあるのではないかと考えずにはられません。

一方、国際的競技スポーツとして認知されつつある「eスポーツ(ビデオゲームの対戦)」は、座位行動として不健康なイメージがありますが、体力水準の壁を超えてオンラインでプレーし、孤独解決にも寄与しうる「インクルーシブスポーツ」としても注目されています。私は上手い訳ではありませんが、幼少期から仲間と『ストリートファイター』をプレーして友情を育みました。「もしも、サイバー空間での組み合いでも自他共栄できるのか?」「若造」体育科学者として、この「オンラインスポーツ」にも大いに期待を寄せています。

●松井 崇(まつい たかし)
2020年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「eスポーツ科学の推進——スポーツ科学とICTの融合で生み出す次世代スポーツの社会実装に向けて」



ミュンヘンにて「ニューノーマル」を試行錯誤

Guten Tag! 突然ですが、昨年11月にドイツ・ミュンヘンに移り住んだことから、「お茶っこ通信」のあとを引き継いで「ミュンヘン便り」をお届けすることになりました。ドイツから楽しい情報を発信できればと思いますので、お付き合いいただければ幸いです。

さて、こちらに転居した理由は、夫の転勤です。そう言うのが簡単ですが、もちろん転勤の話が浮上した際には焦りました。私の仕事はどうなるのか? 子どもの保育園は? 単身赴任? と頭を駆け巡ります。しかし、共働き夫婦において、どちらかの転勤のためにもう片方が仕事を諦めざるを得ないことも、単身赴任となって家族がバラバラになることも理不尽に思います。また、転勤を拒むのも違うかもしれません。

財団には、「お茶っこ通信」の執筆者でもある同僚(加賀道)が、宮城県の鳴子温泉で在宅勤務を続けています。そうした良き前例はありますが、ドイツとなれば距離だけでなく、時差もあります。ただ、未曾有の事態となった新型コロナウイルス感染症の拡大とそれに伴うテレワークの定着によって、距離も時差もそれほど憂慮すべき事柄ではなくなってきているかもしれません。財団でも在宅勤務が日常の風景になってきました。対面で会うことの良さが否定されるわけではないかもしれませんが、毎日会わなくても大丈夫というのは実感としてあると思います。また、私が担当する研究助成プロ



①ミュンヘンの観光名所の一つであるマリエン広場。新市庁舎の仕掛け時計の人形が動いていました。
②イングリッシャーガルテン(イギリス庭園)でサッカーボールを蹴る夫と娘。

グラムと特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」では、「オンライン・カフェ・ミーティング」という企画を立ち上げたところ、北は北海道から南は沖縄まで、いやさらに海外まで、居住地を問わず集まり気軽に話す場を作ることができました。オンラインを活用することで、これまでにない新しい交流のかたちが生まれつつあると思います。

こちらに来て3か月余り、まだまだ試行錯誤のなかですが、現状の働き方としては、日本時間午後1時(ドイツ時間午前5時・サマータイム午前6時)から始業し、ちょうど日本の同僚がお昼から帰ってきた頃に合流しています。やはり時差は厳しく、午後すぐの会議では、私だけ寝ぼけた顔つきで画面に映ることは避けられません。また、打ち合わせの終了時間を決めておかないと、名残惜しくてなかなか切り上げられませんが、これまでのところ大きな問題はなく業務を進められていると思います。

働き方改革に一石を投じることは難しいかもしれませんが、「ミュンヘン便り」を通して、私なりに海外でのテレワーク経験を皆さんにお届けできたらと思います。また、ドイツについても、生活するなかで感じたことや経験したことを紹介していきたいと思っています。「ドイツではどうなの?」と、ドイツに関する疑問などがありましたら、ぜひお寄せください。私なりに調べ、皆さんと共有できたらと考えています。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」・「外国人材の受け入れと日本社会」

2021年度プロジェクト一覧

2021年度に採択された特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」5件、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」7件のプロジェクト一覧です。

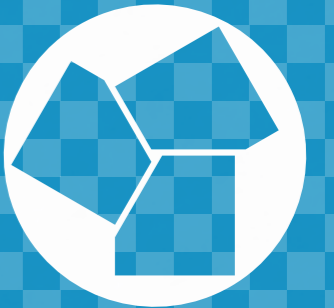
※掲載内容は2022年3月23日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」

代表者氏名	題目	助成金額(万円)
野村 理	医療従事者のバーンアウトを根源的に予防する感情測定モバイルラボ	700
荒川 清晟	コロナ禍におけるXR技術を活用したテレワーク時のメンタルヘルス対策	500
宮原 克典	人間と人工主体の共存のあるべき姿を学際的に問うための新たな枠組み「人工主体学」の構築に向けて	700
櫻井 昌佳	テクノロジーを活用した「誰一人取り残さない新しいメンタルヘルスケア」	650
北崎 允子	市民共創でデザインする未来のパーソナルデータ利活用のあり方	750

特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」

代表者氏名	題目	助成金額(万円)
加藤 徹生	在留外国人の金融排除の実態調査と金融包摂スキームのプロトタイプ構築 —— 金融包摂を通じた在留外国人のエンパワーメント ——	535
羽田野 真帆	東海地域に暮らす難民の就労に関する実態調査および就労環境改善に向けた取り組み	555
神林 龍	科学的根拠に基づいた外国人材政策立案のための共創プラットフォーム	840
土井 佳彦	アフターコロナ社会での外国人材受け入れにおける多言語相談窓口の体制整備と専門人材の育成システムの構築	840
佐土井 有里	日本就労ASEAN技術者の人材育成における課題と対策	760
品川 優	相互メンタリングを通じた留学生と企業内人材の意識行動変容の調査分析と育成モデルの体系化	650
ミラー・ラッセル	多国籍チームによるクラウドソーシングを用いた多言語オンライン健康情報プラットフォーム構築と普及—公平な医療アクセスに向けて	820



REPORT

国際助成プログラム×東京大学 IHS
集中講義「国際協働プロジェクトを支える／実施する倫理と論理」

国 国際助成プログラムでは、「アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——」のテーマのもと、セクターや国を超えた多様なバックグラウンドを持つ人々が、同じ課題に取り組む仲間として協働・共創し、社会変革につながるパートナーシップを

構築するプロジェクトに対して助成を行ってきました。一方、東京大学 IHS（多文化共生・統合人間学プログラム）は、高い専門性を持ちながら、研究領域の枠を超えて実践的な問いを立て、能動的に社会と関わりながら問題解決や価値創造を行うことのできる次世代リーダーの養成を掲げています。

今 回は、IHSで教鞭をとる園田茂人東 京大学東洋文化研究所教授（国際助成プログラム選考委員長）のコーディネートのもと、分野・セクター・文化を超えた協働に焦点をあてた3日間の集中講義を開催しました。国籍や専門もさまざまな修士・博士課程の学生を対象に、1日目はプロジェクトを「支える」立場からトヨタ財団プログラムオフィサー（PO）とOBがそれぞれの経験と協働プロジェクトを見る視点を語り、2日目は協働プロジェクトを「実施する」立場から、協働を実現し継続する上で大切にしている視点を4組の助成対象者にお話しいただきました。講義の締めくくりとなった3日目は、受講生がチームごとに企画立案した国際協働プロジェクトのプレゼンテーションが行われました。

国 際協働には、さまざまな困難が伴います。しかし、多文化共生の理念を具体化し、現実にある課題の解決につなげるには必要不可欠なプロセスです。今回は、POとして改めてプログラムの趣旨を振り返るとともに、助成対象者の方がどのように協働を捉え、実践しているかを共有する貴重な機会となりました。時節柄、対面とオンラインを組

半数がオンライン参加というハイブリッド形式で行いました。実施報告会の様子は、当日のライブ配信とトヨタ財団公式YouTubeチャンネルでのアーカイブ版公開により、本プログラムへの応募を検討されている研究者や実践者の方を含め、広く一般の方にも視聴していただきました。

実 施報告は3セッションに分けて行い、その後、選考委員長のファシリテーションによる全体討議を行いました。第1部は「先端技術を活用した福祉や介護の現場からの課題」、第2部は「先端技術との共創と法的・文化的課題」、第3部は「先端技術がもたらす社会的課題に向けた取り組み」とし



ました。全体討議では、「先端技術と共創する新たな人間社会」に向けて考察するべき論点を整理しながら議論が進みました。前半は、先端技術の社会的価値の検討について、人と技術の関係性はもちろん、自然とのかわりも加えて考えることの重要性にも触れながら討議しまし

み合わせた講義でしたが、受講生の積極的な参加で充実したディスカッションが行われ、提案されたプロジェクト企画はいずれも課題設定のリアリティ、実施内容の具体性ともに非常に質が高いものでした。

講義の要旨を報告書としてとりまとめ、トヨタ財団ウェブサイト等で発信する予定です。（笹川みちる）

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」
2018年度助成プロジェクト
実施報告会

2 021年に4年目を迎えた特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」では、公募期間中である10月29日に、2018年度助成対象者7名によるプロジェクトの実施報告会を開催しました。2019～2020年度の助成対象者と選考委員長の城山英明先生、そして3名の有識者の方にはコメンテーターや議論のファシリテーターとして加わっていただき、総勢22名が登壇しました。緊急事態宣言が解除されていたこともあり、参加者の約半数が会場に集まり、残り

INFORMATION

2022年度の公募を開始！

2022年度の国際助成プログラムの公募を4月1日より開始いたしました。

国際助成プログラムは新型コロナウイルスによって顕在化した諸課題への対応を始めとするアジアの共通課題の解決に取り組む人々が、互いに交流し学びあうことを通じて新たな視点を獲得し、次世代が担う未来の可能性を広げていくことを目的としています。

また、2022年度は、これまでの東アジア、東南アジアに加え、南アジアも対象地域となります。

国内助成プログラムと研究助成プログラムの公募も4月4日から開始しております。詳しくは本誌16ページからの事業計画、当財団ウェブサイトでご確認ください。皆様からのご応募をお待ちしております。



本実施報告会のアーカイブ動画は上のQRコードまたは、トヨタ財団のYouTubeチャンネルからご覧ください。

（加藤慶子）

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





近所の公園近くで咲き誇る春の花。ミュンヘンにて。(P.23参照) [Y.T.]

【編集後記】
LAST WORD

●この号がお手元に届く頃には、桜前線は青森や北海道にまで到達していることでしょう。毎年「近所さん達と近くの桜の名所でお花見」というよりも宴会をしているのですが、この2年間は自粛しました。残念ながら今年も自粛となりそうです。来年こそは満開の桜の下で存分にお花見をしたいものです。

ところで、桜というと「入学式」のイメージ(ピッカピカの〜)ですが、桜の開花時期は結構早く、東京だと平年で3/24。むしろ「卒業式」に似合いそうです。もっとも開花から満開になるまでに8日ほどかかるそうですし、それから散り終わるまでに同じくらいとして、ギリギリ入学式の頃にも桜が残っているというところでしょうか。ですから、あのCMでも一年生のランドセルに桜が舞い散っているわけです。

もう一つ、「桜の開花600度(400度)の法則」をご存知でしょうか? 2/1からの最高気温(平均気温)の累計が600度(400度)を超えると桜が開花する、というものです。天気予報の時に気象予報士さんが時々話されたりしていますので、耳にされた方も多いと思いますが、大体2〜3日の誤差の範囲で当たります。ただ、この説に従うと、地球温暖化による気温上昇に伴ってどんどん桜の開花時期が早くなり、いずれ入学

式の頃には葉桜になってしまっているという事態になりかねません。未来の一年生達のためにも「STOP!地球温暖化」に身近なところから取り組みましょう。[MO.]

●先日の夜、寝ようとしていると4歳になる娘が「うさぎがぴよぴよ飛んでいるよ!」と、窓の外を指差しました。私も慌てて外をみると、大きくて立派なうさぎが自宅マンション前にある小さな公園の中を、あつちにぴよぴよ、こつちにぴよぴよと跳ねながら、草を食べているようでした。美味しい草があるのか、しばらくの間、公園のなかを元気に飛び回る姿を、娘とふたりで眺めることができました。「うさぎが見られるなんて、明日は何か良いことがありそうだね」と娘に話すと、「サントタさん来る?」と嬉しそうに私の顔を見上げるので、「サントタさんはこの前来たし、もう暖かくなってきたからな、いまの時期はどうだろうな」と曖昧に返答。その日から、我が家ではうさぎが来ていないか確認するのが寝る前の日課です。うさぎの来訪に、ミュンヘンの春の訪れを感じています。[Y.T.]

●コロナがなかなか落ち着かず、ウクライナ情勢も気になる今日この頃ですが、暖かな春を迎えました。4月から新生活を送られる方も多いのではないのでしょうか。

先日私の里川である野川を散歩しながら、子どもたちは友達と連れ立って自転車で行き、ザリガニや小魚を捕まえたりして遊んでいたことを懐かしく思い出しました。散歩の目的地は都立野川公園です。野川源流の湧水は国分寺市にあるのですが、そこから少し下ったところに、小金井市、調布市、三鷹市にまたがるかたちで野川公園があります。公園には自然観察園が併設されていて、四季折々の草花を自然に近い形で間近に観察することができ、表紙の写真はそこで撮影しました。これからの行楽シーズンにぴったりの公園で私の一押しスポットです。

さて、今号からミュンヘン通信がスタートしました。皆様からの「質問もお待ちしておりますので、同封のハガキでお寄せください。」
JOINTウェブサイトも充実させていきたいと思っておりますので、本年度もよろしくお願いたします! [Y.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.39

発行日 2022年4月20日
 発行人 山本晃宏
 編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビル37階
 [TEL] 03-3344-1701
 [FAX] 03-3342-6911
 [URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
 デザイン エディション・ヌース
 印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey
—旅の途中で—

三月中旬に訪れた神奈川県松田山農明寺史跡公園では河津桜と菜の花がきれいに咲いていました。
●写真撮影：新出洋子



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>

